

としょかんNEWS 第92号



2014年11月10日
湘北短期大学図書館

さぼ一ち倶楽部、活動報告！

● 湘北祭に出店しました

10月18日(土)・19日(日)、第41回湘北祭が「Plus1 プラスワン～なかまと共に笑い合おう～」をテーマに開催されました。

さぼ一ち倶楽部では、図書館オープンスペースに「アトリエさぼ一ち～アイロンビーズ工房～」を出店。今年はアイロンビーズ作成、さぼ部メンバー手作りしおりの販売の2コーナー設けました。両日ともに好天に恵まれ、アイロンビーズを楽しむ親子連れでにぎわいました。おしゃれなチャームとレース付きの金属製ブックマークも、在学生や卒業生に「かわいい！」と好評でした。

また、今年の湘北祭ではさぼ部の出店のほかに図書館の企画として絵本の見本巡回、絵本カバーde エコバッグづくりのワークショップも開催。図書館で不要になった絵本の表紙カバーを使って、在学生や親子連れがエコバッグづくりに挑戦しました。図書館にお立ち寄りいただいた皆さま、ありがとうございました。



● 図書館総合展ポスターセッションに参加しました

11月5日(水)～7日(金)にパシフィコ横浜で「第16回 図書館総合展」が開催されました。図書館総合展は、さまざまな図書館についての最新技術・サービス・トレンド・学術情報を紹介する展示会です。

さぼ一ち倶楽部ではく図書館学生サポーター「さぼ一ち倶楽部」の野望」というテーマでポスターセッションに参加しました。ポスターセッションのコーナーには、図書館の取り組み紹介、研究成果の発表などのポスターが展示され、説明担当者と直接話すことができます。さぼ部メンバーも自分たちが作ったポスターの前に待機し、お越しいただいた方に活動内容を紹介しました。

今年のポスターセッションには多くの図書館学生サポーターが参加し、ポスターも力作ぞろい。これを機に他大学のサポーターとの交流の輪が広がるといいですね。



皆さんこんにちは。保育学科の赤井と申します。私は正直なところ、あまり本を読む習慣がないのですが、たまたまダンナさんが持っていた鈴木敏文著、緒方知行編『商売の創造』(講談社、2003年)という本をパラッとめくってみたところ、意外にもスラスラと読みやすく、自分にも参考になったなと思いましたので、今回ご紹介させていただきます。

この本は、コンビニエンスストアとして誰もが知るセブン-イレブンの創設者であり、現在、セブン&アイ・ホールディングスの代表取締役会長である鈴木敏文氏の発言を抜粋する形で構成されています。昨今の低迷する日本経済において、企業のあるべき姿、社会人、ひいては人々のあるべき姿に対し、数多くの助言と主張が展開されています。

ここまでの説明を聞くと、「小難しい話かな?」と感じる方もいらっしゃると思いますが、そうではありません。むしろ、この本で語られている内容は、日常生活に直結するものとなっています。例えば、人は得てして「相手を怒らせたらまずい

から」という理由だけで、やるべきことをやれない状況に陥りやすいですが、この本の中ではそういった考えをバツサリと一蹴し、「妥協しない姿勢」の必要性を説いています。また、リスクを過度に恐れ、回避するために縮小均衡に陥りやすい傾向については、物事をしっかりと認識した上で「挑戦」をすることの重要性を強く訴えています。

私はこれらのメッセージを読んでいくうちに、日常のふとした疑問について常に「何となく」の理解で済ませてはいないか?また、興味の対象外のものには暗黙裡に蓋をしてはいないか?など、改めて自分の行動を振り返る良い機会を得ました。

ビジネス書というと、何となくとっつきにくい、難解なイメージがあるかと思いますが(実際に多くの書はそうなのかもしれませんが)、中には非常に平易に、わかりやすく、物事の本質を語った良書もあります。学生の皆さんも是非ジャンルに捉われないで、色々な本を気軽に手に取らせてみたらいかがでしょうか?

【連載】館長閑話(13) クローニン著『孤独と純潔の歌』からスコットランドを思う 館長 野口周一

連合王国イギリスからスコットランド独立の是非を問う住民投票は、9月18日に実施され、独立は否決された(賛成45%、反対55%)。抑々、「大ブリテン王国」の成立は1707年のイングランドとスコットランドの合同による。その後、長きにわたるイングランド中心の体制により、スコットランドには根強い不信が積み重ねられていった。

高橋哲雄著『スコットランド 歴史を歩く』(岩波書店、2004年)は、英・仏という大国に挟まれ、内部には分裂をかかえた小国スコットランドの複雑な軌跡を手際よく纏めている。そこには著者の深い学識と歴史の舞台を散策することによる思索の結晶がある。

私は高校1年のときに、『クローニン全集』全20巻(三笠書房、1964-65年)を手にする機会を得、『帽子屋の城』『城塞』『天国の鍵』を通して、特に人物造形(性格創造)の面白さに夢中になった。

さて、標記の書は著者の自伝的要素が濃い作品である。主人公はロバート・シャノンといい、父の故郷・アイルランドでカトリック教徒として育ち、両親の死後、8歳でスコットランドに住むプロテスタントの祖父母のもとへ引き取られるのであるが、カトリックの信仰を貫くがために、編入した

小学校では先生の皮肉と級友のいじめに遭う。そこに深い宗教対立の根が描かれる。そのロバートの精神的な後ろ盾になった「おじいちゃん」は、ぐうたらな性格で、酒は飲む、嘘はつく、おまけに女好きで、しかも無一文の居候なのであるが、真の人間として何に最高の価値があるかを知る人物としてロバートを教導する。何とも素晴らしい「おじいちゃん」なのである。

本書の原題は“*The Green Years*”と言う。訳者の竹内道之助は、「本書をつらぬく精神的雰囲気を重ねて、敢えて如上のような邦訳名としました」(「解説」)と述べる点にも感嘆し、続編の『青春の生きかた』とともに私を魅了した。私がなぜ本書に惹かれたのか、それはロバートの学友ギャビンとの友情、美少女アリスとのほのかな恋の芽生え、奨学金試験に向けての凄まじい努力、この試験に献身的な応援をするリード先生との師弟愛、春の目ざめによる性本能とたたかう苦行、といった諸点にあったと思われる。当時原書を取り寄せ、原文で読まねばならないと意気込んだ、私の青春の一コマである。

なお、このスコットランド独立への動きは、日本における沖縄の将来を示唆するものとして重要である、と私は考える。